

# グリーンサークル25号

クローズアップ 清水武志朗  
活動団体クローズアップ 一本杉公園みどりの会/水辺の楽校  
多摩しみどりのかわら版 吉井和弘



スイセン

～クローズアップ～

みずとみどり

多摩市民環境会議 会長 清水武志朗

私たちが住んでいる日本は、とても緑が豊かで「水」が豊富な世界に恵まれています。

それは毎日私たちが生きて行く為にはかかせず、同様に「みどり（植物）」にとっても「生命（いのち）の水」ではないでしょうか。

森林や樹木種の豊かさ、生物種の多さ、植物の種類、水の豊かさ、清冽さ、自然の色あいの深さ、自然環境の多様性、地形の複雑さは世界一の国です。

この様な自然の豊かさの中で育つ子ども達は小さい頃は、昆虫が好きな子が多い。しかし、大半の子ども達は、成長とともに昆虫から心が離れていってしまいます。私も同様に昆虫に魅せられ、植物にも接するようになり、今にいたっています。

昆虫の多くは身近な生き物で、裏山にはもちろん街虫にもいろいろな種がいる。ファーブルは大声でなく「セミ」の近くで大砲を鳴らし、「セミ」が全く動かないという実験結果を得る。それは「セミ」にとって自分たちの声は聞こえるが、大砲の音は「セミ」の可聴域にないからであった。同様に最近の研究では、都会の「セミ」が騒音に対して、泣き方を変えているという事がわかった。騒音が可聴域に入ってしまう、それが仲間同士の交信をさまたげるからで「セミ」の健気さ、そして「ヒト」の罪深さを感じる一例です。他にも面白いことがたくさんあるが、私達は多くを見過ぎてしまっている。それは昆虫に関心を持つ大人の少なさによるところが大きい。子どもの頃には大好きだった昆虫も回りの「気持ち悪い」という刷り込みによって、嫌いになってしまうことが多いようです。人間より長い間、種を保ち続けている昆虫に興味がない



乞田川の生物調査

という事は実に惜しいことと思います。そして私の緑との関わりは、父の話から想像すると生を受ける前のDNAに組み込まれていた様

です。稼業は戦前から本所（台東区で現在はプラスチック製品がありますが）、木製の「折り箱」や食品を包む「経木」（杉や桧を薄くはいだもの、きょうぎ）「紐」などを扱う問屋を生業としていました。それをまた、北海道に住んでいる祖父が森林から木を「伐り出し」それを製材、製品とし、その当時、北海道から東京迄鉄道で、貨車を一両仕立てて毎月送り、父がそれを「オート三輪車（当時の車）」でそれぞれの商店へ配達をしたと昔の思い出を語ってくれました。戦前から店を構えていた本所は戦争で焼け出され、「鳥取」に「疎開」をし、戦後は浅草に店を開き、私が物心ついて覚えている店構えは、間口も広く、天井も高く、当時使っていたオート三輪がそっくり中に入る程の玄関が大きな家でした。その頃の話から、父が心身ともに全盛の時だったのでは。

私が中年になって、父から昔話を聞いて、初めて現在の自分の仕事の原点がここにあるのかと、漸く合点がいった次第でした。私達の「みず」との身近な関わりは「川遊び」、「魚釣り」、「田んぼ（都会ではほとんどしない）」などで、何時も当り前の様に見ていますが、それはほとんど人が「天からの恵み」で、雨として最初の一滴が山に降り、永い時を経て浸み込み、ゆっくりと地上に現れて、私達のもとに届きます。地上に出てくる途中では森林の樹木や灌木類、山野草類を潤し育て、最終的には貴重な飲み水として私達は生かされています。そして生活用水として利用された水はまた、川へもどり、大海を下り蒸発し、雲となり、雨つぶとして地上に降り地球規模で壮大な循環を繰り返しています。最近ではカゼを引いた様に、地球も熱を出したり、鼻水（大雨）が出たり、人間みたいに体調がすぐれないこの頃です。

この「みずとみどり」の豊かさを絶やさない様に、子ども達や大人に又自らも活動を通して理解を深めて貰い、「次世代」にバトンを渡していくことが私の願いです。

## ～活動団体クローズアップ～ 緑の環境で繋がる世代間交流

一本杉公園みどりの会 副代表 川村 隆

### グリーンボランティア講座一期生が活動開始

一本杉公園みどりの会は、平成15年(2003年)1月に、前年行われたグリーンボランティアの第1回講座の修了生6名により始められました。

現在は、一本杉公園内の「蛍沢の森」、「山桜の森」、「旧有山家の森」、「古道の森」、「見晴らしの森」それに「観察園」と6か所の活動エリアがあります。

活動の中心は、雑木林と緑地の整備です。市民の散策や憩いの場として快適に過ごせる公園を目指しています。「よこやまの道」も園内を通り抜けますので、市外からの来訪者、ウォーキンググループの来園も多くみられます。

### カブトムシ幼虫の飼育支援

近くの小学校3年生のカブトムシ飼育の支援活動も行っています。2016年は、こども達が手作りのペットボトル飼育器持参で公園まで歩いてきました。5月上旬に公園内で育ったカブトムシの幼虫を、腐葉土と一緒に渡しています。学校や自宅で、蛹化から羽化までを観察したと報告もありました。

後日談ですが、学校では、授業としてカブトムシを飼育するので、落葉囲いを校内に作りたいとの話もでて、そのお手伝いも必要になりそうです。

### こどもまつりで竹細工づくり

雑木林と緑地の整備にまつわる話は、多々ありますが欠かせない活動には、グリーンライブセンターとの協働があります。

その一つ、「ガーデンシティ多摩センターこどもまつり」の「竹細工づくり」について詳しく紹介いたします。

この活動は、多摩大学梅澤ゼミの学生とも協働するユニークなものです。

具体的には、竹馬、竹ポックリ、竹笛、チャカポコ(竹のけん玉のような遊び道具)、さらに竹の水鉄砲、竹とんぼ、竹のぶんぶん回しなど竹を素材にした遊びを体験します。未完成の竹細工を子どもも家族の方も一緒になって完成させかつ遊ぶというものです。

竹馬は、真竹を用意しましたが、国産の竹の入手が困難で、中国産の真竹を竹問屋から購入しました。数が少なれば真竹を譲っていただけるところがありますが、30組分と数がまとまるとそうはいきません。

また、竹馬づくりでは、節の高さを合わせるのが鍵ですが、竹、一本一本の節間が異なり、具合の良い組を揃えるのに一苦労しています。足を乗せる台部も竹で作り、それを棕櫚縄でしっかりと結びます。この棕櫚縄結びが、力もコツも必要で、なかなか子供だけでは大変です。

竹ぽっくりは、孟宗竹を使いました。例年、グリーンライブセンター周辺の竹林から、必要な本数を切り出しています。学生も一緒に切り出し作業をしましたが作業で汗を流す彼らの姿には、若い力が感じられ眩しく映りました。

長い竹でも、竹ポックリに使用できるのは、節の部分だけ。これまた、必要な組み合わせを、学生たちが慣れない鋸で100組切り揃えるのは容易ではありません。さらに、紐を通す穴を開け、適当な長さの紐を個数分用意して準備完了です。

竹笛には、篠竹を使いました。篠竹は、メカイ作りにも用いられますが、竹笛には親指ほどの太さのものを用いました。公園内の篠竹の藪から、適当なものを探し出すだけでも大変です。学生も一緒になって、藪をかき分けて探しました。まさに藪漕ぎです。その竹をきれいに洗い、7cmと5cmほどの長さに切り揃え、音の出る穴と吹き口の切り込みを整えます。子供の口に直接あたるだけに、竹のバリを取り滑らかにします。紙やすりで250組の竹笛を仕上げるのは、まるで修行の様で、一週間ほどかかりました。

まさに会員それぞれの経験と知恵を総動員し、若い学生もアイデアを出しての共同作業。成果としての竹細工を子供たちに提供でき、その喜んでいる様子を見た時には、充実感をたっぷり味わい、愉しめました。



大学生も参加して竹の伐採



竹ポックリの準備中



こどもまつり当日の様子



～活動団体クローズアップ～

## 多摩川源流体験サマーキャンプ

多摩市水辺の楽校運営協議会代表 西 厚



1日目の沢登りの様子

多摩川・大栗川・乞田川を拠点に子どもたちが水辺の自然(魚・植物・野鳥・石・水質等)に親しみながら体験を通して学ぶ楽校づくりを目指しています。

その中の一例、毎年夏休みに開催する「多摩川源流体験サマーキャンプ」2泊3日について紹介します。平成28年で11回目となり、すでに参加者は延べ160名を超えて最初の方は大学生かなという状況です。

参加対象は小学3年生以上中学生まで定員20名、たま広報を通じて募集。28年度は43名の応募者があって抽選で23名と一緒にってきました。

## 1日目

多摩市から小菅村源流大学へ向かいます。そこでNPO法人多摩源流こすげ(現地指導員)のレクチャーで「溪流のぼり」に挑戦。ヘルメット・ライフジャケットを着用し急坂を下ります。谷間は夏でも気温は低く木漏れ日が射す程度。子ども達は初めてであろう大きな石・倒木・川の流れに逆らって一步一步自力で登ります。途中大きな蛙が現れたり崖にはイワタバコが咲いていたり水中メガネを使ってイワナを見て感動したり…。大きな岩は腕力でバランスを取りながら自力でロープを使って回り込みます(トラバース)。毎年台風等でルートは若干変わるものの指導員に従って子どもたちは果敢にアタック。登りつめたところには水深のあるところがあり、飛びこんだり川流れで遊びます。楽しい冒険も終わって急坂を登り水源林雑木林へ。多摩川源流研究所の所長中村文明さん曰くいつも森の中で「水は命」「森は源」「川は絆」と教えてくれた。宿は村営で旧小学校の分校だったところ。釜・鍋・食器等は揃って、食事は自炊。夕食後「小菅村に棲む動物」の話为指导員から生息動物の頭がい骨・毛皮等を使って解説を聞く。夕暮れ鎮守の森御鷹神

社へムササビ観察。真っ暗な木の上を赤いフィルターを付けた懐中電灯で照らし探す。巣穴があることを確認すると、声が聞こえた。そこへ突然枝を伝って登り大滑空。一瞬だったが飛ぶ姿を見せてくれた。

## 2日目

「多摩川の最初の一滴」を目指して出発です。緑輝く苔や小鳥の声を聴き高度を上げます。ヤブ沢峠を経て笠取小屋(1775m)で宿のおばさんたちが朝早くから作ってくれたお弁当を食べ一息。山の天気変わりやすく、早めの行動が肝心です。途中小さな分水嶺(荒川・富士川・多摩川)を通過、水干(標高1865m)へ。多雨の7月で最初の一滴のポツリは見る事ができた。この一滴が138kmの旅のはじまり羽田空港河口へ注ぐ多摩川だ!

帰路は笠取小屋まで同じ道に戻り鹿にばったり遭遇。途中急な近道を選び下山、天候に恵まれた素晴らしい1日。

夜はバーベキュー・花火・スイカ割りと楽しみのひととき、宿の広場で展開。牛肉が沢山あって食べきれぬの?と思ったが山登りで腹が空いていたのだろう。きれいに完食できた。

## 3日目

午前中は農業体験ジャガイモ掘りとニジマスのつかみ取りです。ジャガイモ畑は宿の管理人のご好意で毎年実施しています。畑を全員で12畝を朝から掘り起し汗をかき、川へと移動してニジマスのつかみ取りへ。予め川の上流と下流側に網で仕切りをつくりそこへ70匹を放し子どもたちがつかみ取り挑戦。すべて獲らないとお土産が減ってしまう。つかみ取りなんて初めてでどれだけ取りこぼしがあるかと心配をしたが、何と71匹ゲット!その後さばいて炭で焼いて完了。早速昼食で試食、半分はお土産に。ジャガイモも仲良く分けました。

僅か3日間でしたが、子どもたちは殆どの行動を自分で完遂したことは自信に繋がったと思います。素晴らしい達成感だったのではないかとも思います。

スタッフ一同今後とも良いイベントに挑戦していきたいと思っています。

☆この他のイベントも毎年実施しています。

「川の生きもの調査・観察会ガサガサ」「カヌー体験」

「乞田川の恵みガサガサ」「冬鳥観察会」

## 多摩しみどりのかわら版

みどりの拠点づくりに向けて  
環境部長 吉井 和弘

環境部長の吉井です、よろしくお願いいたします。



新春のグリーンライブセンター

4月の異動の挨拶で、グリーンライブセンターにお邪魔した際、ふとオープンセレモニーのお手伝いをしたこと、更にその後幾度となく訪れ、当時のS所長からハーブや植物についての楽しい話を聞かせて貰った事が想い起されました。また、このグリーンサークル紙は、グリーンライブセンターに

係わりのある方が活動状況の紹介をされたり、先輩諸氏がみどりのかわら版として情報提供をされており、今回改めて、なつかしく読み返させていただきました。

現在のグリーンライブセンターは、当時の状況からは大きく様変わりをし、恵泉女学園大学、多摩市グリーンボランティア連絡会や多くのみどりを親しまれる方々により支えられ、まさに「みどり豊かで快適なまちづくり」を目指すみどりの拠点としてグリーンライブの構想が実現しつつあるのではないかと感じています。

しかし、日本全国で展開された「緑の相談所」も、時代の変遷と社会状況の変化のもと、都内ではグリーンライブセンターだけとなり、東京都などからもその存続・

発展が期待されています。

多摩市における多摩ニュータウン開発事業も、多摩センター地区のまち開きとともに佳境を迎え、特に多摩中央公園は、ニュータウンの中心にみどりのオアシスとして計画され、丘陵地形を活かし正面に文化の殿堂としてパルテノン多摩を配し、両翼をみどりに包まれた公園として1987年(昭和62年)に開園しています。

いま、30年の時が経過しようとしている中で、多摩センター地区の活性化とともに、多摩中央公園のリニューアルも予定していますが、引き続き、みなさんに親しまれ、利用していただける「みどりの拠点」づくりをみなさんと一緒に進めて参りたいと考えておりますので、改めましてよろしくお願い申し上げます。



多摩中央公園

## 編集後記

今回の活動団体の記事を読んでいて、ふと「色」を連想していた。竹細工の話に艶やかな若竹色を、多摩川の源流の話には透き通るような水色を。そこから日本の伝統色について少し調べてみると、現存する和の色名は1052色あるのだそうだ。それぞれに奥ゆかしい名前がついていて美しさも感じる。もちろん最近名付けられたわけではない。現代よりも色について表現の幅が広がったのではないだろうか。利休色、長春色、花葉色、天色……。今年もたくさん色を感じ楽しみたい。(高澤 愛)

## 表紙の絵

## 「スイセン」(ヒガンバナ科)

原産地は地中海、日本には平安末期に中国から渡来。  
漢名の「水仙」を音読みして「スイセン」になりました。

## 絵・内城 葉子

<プロフィール>1949年東京生まれ。

1986年国立科学博物館第2回植物画コンクール文部大臣奨励賞、  
1989年世界らん展ボタニカルアート部門ブルーリボン賞、英国王立園芸協会ロンドン・フラワーショーGold Medal受賞など

<所属>日本ボタニカルアート協会、日本植物画倶楽部、どんぐり山を守る会代表

<著書>「鏡の中-俳句と植物画」共著、2005年新風舎。他、絵本や学習図鑑などに描画。雑木林などの活動を通じ、実際の木々や草花に触れることが細部に及ぶ精密な描写となり、植物本来の温もりを感じられる作品が特徴です。

多摩市グリーンボランティア通信 グリーンサークル25号

発行日:2017年1月15日

編集・発行責任:多摩市グリーンボランティア連絡会 事務局

〒206-0033 東京都多摩市落合2-35 多摩中央公園

多摩市立グリーンライブセンター内

電話 042-375-8716 FAX 042-375-0087

ホームページ <http://www.keisen.ac.jp/tgl/>